

中期計画スローガンを カタチにするために

⑤ ぱれっとの家 いこっと編

2020年1月、ぱれっとの事業のこれからを描く上で重要な「中期計画スローガン」が完成しました。コロナ禍で間が開いてしまいましたが、特集として、各事業がこのスローガンをどのように形にしていけるのかについてお伝えしています。今回はぱれっとの家 いこっと(以下いこっと)編です。

1993年えびす・ぱれっとホーム設立時、そこでの生活を2~3年経験した後、将来的に地域で自立生活を目指すことを目的に入居者を募集しました。しかし、一人暮らしするにはハードルが高く、地域生活支援を受けるための福祉資源がその当時はほとんどありませんでした。

障がいがあってもなくても地域で当たり前に暮らせる場所、少しのサポートで自立できる住まいを作る構想が生まれました。2010年、障がいのある人たちの新たな暮らしの選択肢として「いこっと」が誕生したのです。ソーシャルビジネスとして公的な補助金を受けず自立した運営開始から11年、入居者が入れ替わる中、振り返りを重ね課題整理をしながらこれからの方向性を見出す作業に入りました。その様子をいこっとサポットの会(以下サポットの会)のメンバーとともにお伝えします。

●いこっと設立の経過とその思い

当時(今も残念ながら大きくは変わっていないようですが)知的に障がいのある人の8割以上が自宅で暮らしていました。グループホームなどの施設で暮らす方もいますが、親や施設から自立して生活している方はごく少数でした。しかし、障がいが軽度で身の回りのことが自立してできる方もおり、そうした方をぱれっとがサポートし、自立して生活する機会を増やしたい

と考えました。障がい者が自立して生活するために必要なサポートとは何か、それは「同じ家に共に暮らす“人”がいること」だと考えました。その考えを基に2009年1月、後に「いこっと」と名付けられる、知的に障がいのある人と健常者が共に住む新しいタイプの家をつくるため、「ぱれっとの新しい家づくり計画」が始まりました。計画はぱれっとの職員や障がいのある人本人とその親、ぱれっとのボランティア等の有志が集まってワークショップ形式で進めました。ワークショップは全部で24回開催され、毎回15~20人の参加者が集まって「新しい家での生活のイメージ・障がい者と健常者のイメージのギャップ・不安な点・心配な点とその改善策」、「間取りとバリアフリーの考え方」、「計画を進める上でのミッション・入居者募集チラシの内容・アンケート調査・建物の名前」などを話し合いました。2010年1月から「入居者ミーティング」を入居前までに3回行ない、生活のイメージのすり合わせを行ないました。現在も月に1回程度開かれています。そして、2010年4月、ぱれっとの家「いこっと」が完成しました。

(いこっとサポットの会 高取正樹)

●いこっと設立後の様子

初期の入居者は、家づくりプロジェクトに関わってきたボランティアやたまり場

利用者が多く、いこつとやぱれつとを初めて知って来た人は少数派でした。最初の入居者たちは住む前に何度かミーティングを行ない、どんな期待を持っていこつとに来たのか、どうやって支え合って暮らしていこうか、などを話し合いました。その中で、いこつとでの役割(係)も決めました。

全体のまとめ役としてのリーダー、共用の消耗品などを買うために入居者が出し合うお金を管理する会計係、分担された掃除がきちんとできているかチェックする掃除係、みんなで遊びに行ったりする企画を出すイベント係などです。一緒に生活を作り上げていくメンバーとして、当然障がいがある人にも役割を担ってもらいました。いこつとの最初の一年はこうした役割分担をしつつ、たまり場関係者が多く入居していたということから、たまり場での関係性や雰囲気強く反映された運営となりました。

(いこつとサポットの会 松村昂明)

●人間関係でのトラブル

他人同士が暮らすシェアハウスでは入居者同士がコミュニケーションを取り、人間関係を良くすることも大事な要素となりますが、いこつとを運営する中で、入居者間でのコミュニケーションが不足し、障がいのある人ない人に関係無く、人間関係によるトラブルが起きた時期があります。いこつとでの暮らし方について、入居者間でうまく噛み合わず、話し合いができないまま時間が過ぎてしまい、そのうち溝が大きくなり、シェアハウスでの共同生活が難しい状況になっていきました。その時は運営の立場から、ぱれつとが仲介に入り、各入居者から丁寧にヒアリングを行ないましたが、事態収束には1年以上かかりました。最初

は些細なボタンの掛け違いから人間関係が崩れ、さらに収束するにはその何倍もの時間と労力を費やすということを学びました。自分がいこつとでの理想の暮らしを思い浮かべていても、それが70%ぐらいで許容でき、相手の考えも尊重することができないと人間関係に綻びが出てきてトラブル発生の原因になってくると思いました。

(いこつとサポットの会 稲沢 憲)

●楽しみを見出す共同生活

多様な他人と共に暮らしていく上で重要なポイントは、朝型人間なのか夜型人間なのか、騒音をどれだけ出すのかなどの生活パターンです。ドアの開け閉め、戸締り、電気や水道など共有のものにも気をつけなければなりません。家の意味をどう考えるかによっても意見の差が生じます。家を'休む空間'として考える人は静けさが必要な反面、'楽しく遊ぶ場所'と考える人は一緒にテレビを見たり料理をしたりして賑やかに過ごしたい。また、お互いに譲り合う部分が多いです。

「自分の方が損をした」と思う時もあるし、不満も簡単に言えない時もあります。お互いに避けるようになり、共同生活が苦しくなることもあります。そうならないために相手に不満を感じたら、フィードバックをしなければなりません。共同生活はこのように難しい部分も多いですが、自分のライフスタイルを知って、他の人々の人生を共有して学んでいく中で自ら成長することも楽しさではないかと思います。

(いこつとサポットの会 カンナル)

●いこつとが抱える課題

現状のいこつとが抱える課題は大きく2つあります。1つ目は、障がいのある入居者が増やせていないことです。いこつとの

運営目的は「障がいのある人の暮らしの選択肢を増やす」ことです。自立した生活ができる障がいのある方にとって、グループホームではなく、「他者との共同生活」が、住まい方の選択肢に入るようにしたいと考え、11年間運営してきました。しかし、現状は障がいのある入居者は1名となっています。今年のテーマに「障がいのある方の入居者を増やす」を改めて掲げ、就労センターへのチラシ配布やたまり場ぱれっとでの暮らしに関する勉強会などを行なっています。まだ、いこっとで暮らすことの意味を伝えきれていない現状であるため、情報の発信方法は改善と強化を続けていきたいと考えています。

2つ目の課題は、入居者同士の人間関係づくりです。いこっとでは「入居者同士の交流とコミュニケーション」を大切にしています。育ってきた環境、生活へのこだわりやリズムが異なる他人同士と一緒に生活する中で、どのような工夫をすると「みんなが安心して暮らせる環境をつくれるのか」は11年考え続けてきています。生活の中で困ったことがあったり、何か問題が起こった際に、「入居者同士でコミュニケーションをとり解決できている状態」を目指す姿ではありますが、その仕組みに答えが出ていません。

いこっとの運営を振り返った時に、大きな転換点は「いこっと立ち上げ時に関わっていたメンバーの入居者がいなくなったタイミング」でした。最初の5年ほどは、立ち上げに関わっていたメンバーが入居していたことで、いこっとが大切にしている考え方を理解し、運営側であるぱれっとともコミュニケーションを取りながら、一緒に生活をつくることが可能でした。

しかし、上記のメンバーが退居した後の

新しい入居者は、いこっとの理念、大切にしている考え方を知らずに暮らしは始める方も出てきました。一般の入居者を募集すると、いこっとでの暮らしを選ぶ理由は「駅近であることの利便性」「設備が綺麗であること」「恵比寿の中では家賃が安いこと」などが挙がりやすくなってしまいます。

サポートの会として、最も大切にしている「人間関係を大切にしたい暮らし」を実現するための、入居前後の説明の方法、入居者ミーティングや、日々のサポート体制などは、これからも改善を続ける必要性を感じています。

(いこっとサポートの会リーダー 黒澤友貴)

●サポートの会が出来ること

こうした課題がある中で、私達ができることは何でしょうか。

まず、1つ目は、「障がいのある人もない人も共に暮らす」という考え方を事例として多くの障がいのある方、ない方に伝えていく事です。今、実施していることは、こうした暮らし方を障がいのあるなしに関わらず語れる場所を作ることです。たまり場の活動(現在は「たまり場はなれ」として)で「新しい暮らしを考える会」として、「住まい・暮らし」について、ざっくばらんに障がいのあるなしに関わらず自由に語れる場を設けています。例えば、「こんな住まいに住みたい」といった質問に対しては、「お城みたいな豪華な家に住みたい」「部屋はこういう風に飾っていきたい」「キッチン充実させたい」など、個々人の思い、こだわりが参加者の中で共有できます。そして、「一人で住みたい」「仲の良い友達と住みたい」など、共同生活に関連する障がいのある方本人の意見も聞かれます。こうした意見は、いこっとに長らく関わっている私達にとっても貴重なものです。

2つ目は広報です。新しい取り組み、特色のある取り組みをしても、それが社会に伝わらないと意味がありません。いこつと開設当時は、新聞各社を始め様々な媒体に掲載される機会が多かったのですが、そこから11年経った今では目新しさは無く、広く広報をしていくには工夫が必要です。この部分は理事の前田大地さんにご協力いただけることとなり、インターネットでの広報について、改善をしていくことで、取材とインターネット媒体への掲載が行なわれるなど成果が見え始めています。今後については、いこつとに限らず、住まい・暮らしを語れる場を広げていきたいと考えます。いこつとを作る過程と同じように一部の職員、ボランティアばかりが考えるだけでなく、障がいのある本人、障がいのある子どもがいる親と一緒に語れる場を作っていく、社会に広げていきたいと思えます。

(いこつとサポットの会 田口雄一)

●まとめ・いこつとの方向性

いこつとが入居者を募集する不動産屋に掲載しているPR文は、【若い人、年配者、学生さん、社会人、日本人、外国人、障がいのある人などなど、ただ「住む」だけではなく、入居者同志の交流とコミュニケーションを大切に、住む人と事業を運営する私たち、みんなで暮らしをつくる家です。キャッチフレーズは「住まい方」のバリアフリー化を実践する家】とあります。いこつとがオープンして1年が経過したあたりで顕著な問題になったのは、障がいのある人との人間関係ではなく健常者どうしでした。今もその課題を突きつけられることがあります。シェアハウスで暮らす場合、他人との共同生活を楽しむ目的に応募してくる人と、敢えて言うならば、利便性を主眼に、共有できるものは共有

し効率的な住まい方を求める人とは目的意識が違います。新しく入居してくる健常者に対し人間関係をうまく作りながら障がいのある人の安心安全を見守りつつ暮らしの目標を共有しましょうと伝えているわけではなく、いこつとが理想としてしている「一つ屋根の下で共に暮らす」という雰囲気を作りづらくなっている理由がここにあります。

知的に障がいのある人がいこつとで自立して暮らすために求められるスキルは幅広く、金銭管理やバランスの取れた食生活、怪我、病気、運動といった健康管理、通勤も含めた生活リズムなどの自己管理があります。しかし、健常者でも自己管理が難しい面において彼等に求められるものはハードルが高いと言われてきています。これらをいこつとで共に暮らす人たちが自然な形で見守れる雰囲気を作ることが、入居者が短期間で入れ替わる現状を見た時に、果たして持続していかれるのか。こうした点に、子どもを自立生活に送り出そうとする親の不安が解消されず、障がいのある入居者が増えない理由としてあります。もう一つ、常に満室に近い状態に維持していないと、いこつとの経営が成り立たないという不安定な側面もあります。

こうした問題を解決しながら安定した形で運営できるかが永続的な課題として上げられます。いこつとの存在意義は何か、社会へ発信していくミッションステイトメント、大事にしてきた理念、経営を成り立たせる仕組みづくり等、障がいのある人たちが安心安全に暮らせる環境づくりや外部からの支援導入など多面的な見方で彼等の暮らしの選択肢に成りえるための方策を考えなくてはなりません。(理事長 相馬宏昭)